哲學研究　第八十四號　第八卷第三冊

個體概念を通じて觀たる「形而上學の要求」

河瀬憲次

一

直接なる體驗、思惟未到の境地は從つて無限定にして絶對である。善遍化、合理化の一歩をも許るさゞる意味に於て絶對特殊、絶對非合理其のものである。併も無限定なるが故に尙能く限定の可能を自らの裡に含み、絶對特殊なるが故に他に自らを普遍化せしむる可能を內に有する。夫れ自らは一切の文化を超越するが故に同時に一切文化に顯現し得る、よく文化の根源たり得るも既に現實の文化其のものではない。於此、終に是を神祕の奧龕に歸し、哲學の限界となし、一歩其れに觸るゝものあれば直に是を Mystizismus と見做し、形而上學の獨斷に墮するものとせられる。批判哲學は限界の自覺 (das Selbstbewusstsein der Grenzen) を意味するものであるならば、正

に價値の哲學は一方神祕の深淵に沈まず、他方放膽なる形而上學の獨斷に走らざる所に其の面目と意義とを有すると謂はなければならぬ。

併しながらかゝるリッケルトの所謂先概念的なるものに對し、價値哲學は必然に其の出發點として且つ同時に其の歸趨—自己の立場に純粹なる限りは到底到り得ない歸趨としてかゝる體驗に當面しなければならぬ。認識の對象が問題であると同じく對象の認識も亦問題である。價値哲學の極限概念とも謂ふべき體驗に關する問題をしも何等かの體系に攝し得るにあらずしては價値哲學自らの意義に於て充全たり得ないではなからうか。苟も價値哲學の限界に觸るゝことを以て直ちに獨斷的なる形而上學の痴夢として一概に是を排斥すべきであらうか。勿論形而上學は何等かの意味に於て超越的實在を立するものである。併し價値は一切實在に先行すると謂ふ故を以て超越的實在の想定を獨斷的であるとして論破し得たとするも此のことは直ちに超越的實在一般の否定を意味するとは考へられない。價値を俟つて基礎づけらるゝ實在は對象としての實在である、內在的實在である。今もしかゝる意味の實在を以て超越的實在と見做すならば其は卽ち實在科學に於ける或る特定の實在を以て絕對的なる形而上學的實在に hypostasieren せるものであり勿論

獨斷的たるの誹を免れないであらう。とは謂へ價値は夫れ自體絶對的なるもの、一切實在の根基であると觀て果して矛盾なきを得るであらうか。諸々の價値を以て夫れ夫れの立場に於て自足完了的のものであると觀て此に成立する一種の Atomismus は更らに何等の追及をも許るさないか。Atomismus が苟も其の意義を有し得る限り prinzipium individuanis の上に基かねばならぬ。言ひ換へれば自足的なる價値自體に尙且つ非合理性の問題を措定しなければならぬ。然らばかくの如く合理的なる價値に非合理性の問題を措定せしむる根據を何に求むべきであるか。今其の根據を價値一般にありと見ても尙左右田博士の謂はれるごとく、價値一般の裡に他と自己を區別せしむる非合理性の問題を考へざるを得ない。於此一切の自足圓具の堅柵を破壞するものとして prinzipium individuanis の根據として吾々は視點の無限なる連續を考へざるを得ない。かくの如き視點こそは合理的なる價値の裡に非合理性を措定すると同時に合理化を促す標的ともなるところのものである。而してかゝる合理化を促進せしめた當の視點或は認識目的は其の合理化の完結せる限り其の完結點、究極點をなすものと見得る、卽ち前の價値に對して一層高次の合理的價値である。然るに旣述の如く合理化の過程は無限に進み得るも決して完了的たり得な

いから從つて其の各々の段階に於ける合理的價値も亦無限に可能であると謂はなければならぬ。而してかくの如き價値は勿論何等かの體系的構造を豫想せしめ、且つ其の限りに於て價値相互の間に次序を許さなければならぬであらう。(左右田博士の合理性對非合理性の問題を通じて觀たる極限概念の哲學に於て最も精到に此の論構が示されて居る)併しながら各々の價値は(夫れはまた合理化の Kategorie としてアプリオリである)其れ其れの立場に於ては絶對的であり、從つてまた全然無限定である。他に對し己れ自身を支持し眞に生きたものである。かくの如き絶對的なる無限の價値卽ちアプリオリは必ず其等の主體としての統一體の實在を豫想しなければならぬ。かゝる主體に於て始めて價値は其の絶對性を保持し、合理化の根基となることができるであらう。是こそは價値哲學が價値普遍化の限界として自らの到底觸るゝを肯んぜざるものとして、而して一度觸るゝや直ちに獨斷的なる形而上學に墮するものとして體驗の世界に委したところのものであると謂はなければならぬ。併も吾々はかくの如き統一の實存を認容して始めて價値一般を諸々の特殊價値を基礎づけ得る、而してかゝる統一的主體こそは價値アプリオリを立する根據として、夫の價値によつて始めて基礎づけらるゝ實在とは全然次序を異にせるも

のである。價値の基礎に依存する實在が對象としての實在であり、思惟の立場にある限り、無限なる價値の統一主體は自らに依つて立つ實在として卽ち思惟の立場とは全然異れる立場にあるものとして、而して唯此の意味に於て超越的實在と謂はなければならぬ。一度超越的實在を認識の圈內に持ち來さんとするらば、これは discursiver Verstand の限界內に自己の運命を諦觀すべき純粹理性が僭越にも單なる理念を對象化せんとするものとして、限界自覺の破壞たり、批判的精神の蹂躙を意味するであらう。唯價値哲學の豫想しなければならぬ conditio sine qua non としてアプリオリの統一主體なる體驗としての超越的實在の措定のごときは其の理路に於て決して批判的精神と矛盾せざることを信ずゝ。要するに吾等はかくの如き超越的實在に於て始めて何等かの意味のもとに價値哲學の基礎づけを所期し得るのではなからうか。價値哲學が價値の Verallgemeinerung の極限點として神祕の神殿に秘めたる體驗の世界を啓き得ることによつて形而上學を主張し得るとともに他方獨斷的沒批判的たるの誹をも免れ得ることができるではなからうか。神秘の深淵に錘を入るゝことにより Mystizismus に陷りつゝも尙其の裡に價値哲學の主張を裏づけ得る可能を容れることができないであらうか。解決は遠い、されど問題と示唆と

は脚下にある。

二

體驗の世界、嚴密に謂ふならばかくの如き領域に言說を容るゝことが既に其の領域を脫せることを意味するであらう。併し今何等かの意味に於て其を表現し得るとするならば、價値の普遍的客觀的なるに對し特殊的主觀的であると謂はれる。從つてまた前者の合理的なるに對し後者は絕對非合理的であるとも謂はれる。此のことは同時にまた必然に對する偶然を想ひ起させる。然らば果して如何なる意味に於て偶然たり得るのであらうか。先づ第一に考へられるのは Ursachlosigkeit としての偶然である。ヴ゛ンデルバントの所謂絕對的偶然性である。併し吾々は因果の連鎖の埒外にある何ものかを許るし得るであらうか、causale Notwendigkeit の彼岸に立つて絕對自由を享受し得るものを考へることができるであらうか。吾々は對象界に係はる限りに於て此くのごときものゝ可能を否定せざるを得ない。スピノーザとともにかゝる意味の偶然をば自己の無智に歸しなければならぬであらう。とは謂へかくの如き自然必然性は認識の構成的原理として始めて其の妥當性を有し

得るのである、對象認識の必然的アプリオリである。是を以て對象の實在よりも一層高次なる實在に直ちに適用することは所謂 transzendentaler Gebrauch に陷るものと謂ばなければならぬ。要するに體驗の偶然性は causale Notwendigkeit を超越し、自然必然性の領域外に横はるといふ意味に於て認容せられる。併しながら因果の概念は更らに深き考察を要する。卽ち單に互に離れて孤立的であつた二つのものが如何にして必然的に結びつけられるかは唯單に儼然獨立せるものとして考へられる限りに於ては不可能であると謂ふ他はない。左右田博士が此くのごときは模寫說に基く Begriffsrealismus に陷れるものであるとして因果律を以て「das Gegebene を一定の認識目的に係らしめて單に二つの概念、二つの判定に分拆するに過ぎない」ものとせられて以て「二つの概念は既に因果關係を認めんとする一個の認識目的に制約せられて內容的の制約を受け、相互に關連せしめらるゝ所あるものに變ぜられてあらねばならぬ」と論ぜられたのは深き洞察を語るものであらう。後に述べんとする論理的偶然が單に概念構成の目的によつて制約せられて始めて考へ得る如く因果の關係も既に認識目的に依つて制約せられたものと謂はなければならぬ。この事は軈て目的必然性を以て因果必然性を基礎づくるものとも考へ得べく、一切

認識對象界に於ける冷き因果の連鎖も、もし「永遠の相」に於て認めらるゝならば奇しくも皆悉く目的の光の中に融入するであらう。然らば嚮に述べたごとき體驗の世界の偶然性はかゝる目的必然性にも制約せられないものとして果して偶然たり得るであらうか。無限のアプリオリの統一主體として考へられた體驗の世界が其の本質上單に特定の認識目的卽ちアプリオリに依つて必然せられるとは到底考へ得ないことである、從つて此の意味に於ける目的必然性は體驗の世界に見出し得べくもない。併しながらかくの如き無限なる統一そのものを凡ゆる意味に於て偶然と見ることは不可能である、かゝる統一體の充足理由の原理として統一體自らに內在する意味を認め其の意味の必然なる發展として無限なる統一主體を見なければならぬ。內在的意味の遍滿して餘すところなきに於て始めて無限なるアプリオリの統一が必然せられる、個々のアプリオリも其の特殊的なる卽ち一義的なる顯現と見られるであらう。かゝる意味に於て體驗は必然的である。

第二に偶然の意味に就いて考へ得るのはヴィンデルバントの所謂相對的偶然性としての Gesetzlosigkeit の問題である。說くまでもなく此は何等かの普遍的法則のもとに包攝し得ざるものを以て偶然と見做すのである。之に反し普遍的法則によつ

て說明し得らるゝものを合法則的のものとして偶然に對し必然であると解釋する自然科學の一切の努力の標的は凡ゆる偶然を必然に歸せしむる處にある、言ひ換へれば最も直接なる知覺の事實より出發しつゝ其等の一切を包攝し得る法則を見出さんとするのが其の使命である。併しこゝに問題となるのはかくの如き知覺の事實が既に何等かの法則に包攝せられる可能を有する事實として認められて居なければならぬ事である。知覺の事實は單に事實なるが儘に事實として認められたものではなく、既に法則の光に照して觀られた事實である。法則化せられた事實を出發點として始めて夫れ等一切を包攝し得る法則を見出すことができる。自然科學者は純粹に知覺の事實に基くことによつて自然科學者たり得ないであらう、既に Bearbeitung を加へられた事實に基いて始めて自然科學者たり得る。あるが儘なる事實は依然としてあるが儘なる事實であり、自餘一切に對し一もつて他と換ゆべからざる獨特の位置を占むるものでなければならぬ。然らばかくの如き事實の Bearbeitung の基礎は是を何に求むべきであらうか。

既に考へらるゝごとく歸納法は何等かの意味に於て其の歸納法を基礎づける根據を要する、かゝる根據に基いて始めて歸納し得るのである。推論式の大前提にも

相當すべき此の根據は何によつて可能となるか。此に自然科學者の絶對豫想が横はつてゐる。斯の如き絶對豫想は自然科學によつて説明せらるべきものでなく自然科學をして可能ならしむる根據たるは論を俟たない。却つて是によつて自然科學の全體系が導かれ得るのであり、自己の Aufgabe を決定し得るのである。全體系の出發點であり、やがて其の歸着點である、併も其の體系の各構成部分に自らを實現しつゝあるものでなければならぬ。要するにかくの如き絶對豫想は其の體系の企圖する目的其のものである、かくの如き目的によつて始めて歸納法は其の根據を得、知覺の事實は其の目的に適ひ得るごとく bearbeiten せられる。一切の法則は沒目的でなく目的必然性によつて基礎づけられて始めて合法則性の必然性が可能となる。目的なきところ何等の自然科學的認識を基礎づけ得る餘地はない。

然らばかくの如き意味の法則必然性に對し體驗の偶然性は如何に解釋せらるべきであるか。前に述べたことにより明なるごとく法則必然性の妥當する範圍は當然かゝる必然性を基礎づけるところの目的によつて、換言すれば自然科學一般を成立せしめるアプリオリに依つて構成せられた實在にのみ限定せられる。かゝるアプリオリに基かざるものにあつては一片の塵砂も尙能く法則必然性の圏外に立つ

て自己の偶然性を主張し得ると謂はなければならぬ。斯く觀來るならば體驗の Gesetzlosigkeit は論ずるまでもないことである。

今考へた如き法則と法則に包攝される個々の特殊の場合との關係は又是を普遍と特殊、一般と格段との關係に置換して考へることができる。於此 Gesetzlosigkeit としての偶然は普遍に對する特殊として見られるところの論理的偶然に轉釋される。是が偶然性に關する第三の意義である。而して此の論理的偶然は往々認識的偶然として問題に入つてくる場合がある。普遍は特殊を包攝し得る限りに於て必然的であり、本質的である。特殊は全然普遍と一ならざる點に於て偶然的であり、非本質的である。色の概念は其の内に赤綠黄の各々を含み得る故に必然であり本質的であるが赤色は全然色の概念と一つならざる或るものを有することによつて偶然であり、非本質的である。卽ち此の關係は Gattungsbegriff と Exemplar との關係であるとも謂へる。併しながら此の場合特殊が單に特殊として偶然と見られるのは普遍に對照せられるからである。Exemplar が單なる一事例を意味するのは Gattungsbegriff に對せらるゝが故でなければならぬ。an sich に考察せらるゝならば唯其處には生きたる、具體的なる、自足的 etwas を認めるばかりである。何等他を俟つことなき自らで完

き或るものを見るのみである。普遍といひ、類概念といふ、共に此の具體者を俟つて始めて可能となるのである。要するに普遍も特殊も共に是れ思惟の抽象に過ぎない、從つて此等に結果する論理的偶然のごときも單に特定の視點に基く概念構成の一面を語るに止ると謂はなければならぬであらう。

一度かゝる概念構成の立場を離れ、具體的に見るならば特殊は自らを無條件に普遍の裡に沒入し去るがごときものでなく、却つて或る意味に於て普遍の必然的にして一義的なる現實化としてのみ認めらるべきものであり、一あつて二なきところの具體化の相でなければならぬ。普遍と特殊との何等分つところなき滲透融合に於て始めて、吾々は個體の眞相に徹し得るであらう。西田教授が個體に對する一般を以て單にその一般的典型ではなく、創造力であり一般の中に特殊化的作用を含むで居なければならぬとせられたのも蓋し此の意味を語られたものであらう。

天衣無縫是を分つがごとき全く思惟の抽象に基く。從つて此に普遍對特殊の關係は個體の問題を通じて全體對部分の關係に連り、直ちにカントのOrganismusの思想を想はすものがある。論理的偶然の影消ゆるところ直ちにテレオロギーの光輝き、藝術的直觀の世界が開ける。

然らば體驗の偶然性と論理的偶然性との關係は如何に決定せらるべきであらうか。嘗に既に述べたところによつて明なるごとく論理的偶然は概念構成を豫想する。概念構成はまた同時に目的を豫想しなければならぬ。要するに特定の認識目的に係はりて始めて論理的偶然は其の意味を有し得るに到る。然るにかくのごとき認識目的によつて制約せられることのない體驗の世界はまた同時に論理的偶然を許さざること Organismus としての個體と同一でなければならぬ。

以上私は先づ偶然の意味を檢到することによつて體驗の所謂偶然性の意味が何處にあるかを闡明せうと試みたのであるが此のことはまた下の如く簡約せられるであらう。即ち體驗の世界を以て無限なる價値、アプリオリの統一主體であると見る限りかかる世界は對象的實在に對してのみ妥當なる法則必然性及び論理的偶然を以てしては到底規定し得ざるものであり、尚更に因果必然性をも超越せるものである。一切の認識目的によつて規定せらるゝことなき意味に於て全然偶然的でなければならぬが an sich に於ては自らに內在的なる意味の必然的なる發展として全然必然的であり動かすべからざるものがある。此くの如き消息は吾々をして直ちに個體概念を想起せしめる。個體は勿論對象として超越的實在たる體驗の世界と

同視せらるべくもないが併も等しく對象の世界に屬しつつも尙法則必然性や論理的偶然性に依つて規定せらるゝことなく、時に因果必然性をすら離れ得ると考へらるゝ點に於て體驗界の面影を對象界に於て保持するものと見得ないであらうか。個體概念を通じて始めて吾々は自然科學的對象界より體驗の世界に入り得、價値の究極するところに參し得るのではなからうか。かくて直接なる個體概念により形而上學に到り得る鎖鑰を求め得ないであらうか。嚮に解決は遠し、されど問題と示唆とは脚下にあると謂つたのも正に此の意味を語るに過ぎない。

三

私は迂遠なる論理を辿つて此に形而上學に對する關鍵を個體概念に於て見出さうとするのである。西田教授が既に謂はれたごとく、吾々の經驗の統一と知識の構成との上に自ら異つた二つの態度がある。卽ち「一つは具體的經驗をできるだけ一般的要素に分解して其の一々の關係を一般的法則によつて說明し行くのであり、一つは雜多なる經驗を個體と見て全體の統一を求め更に之を背後の全體の部分と考へ何處までも全體の背景を豫想して綜合的に進み行く」ものである。第一の態度に

於ては具體的經驗は das Allgemeine の單なる一事例とのみ見られ、其の限りに於て具體的經驗自らは das Allgemeine に取つて unbegreiflich であり unberechenbar である。偶然的であり非合理的である。且つ具體的經驗相互の間に於ても何等內面的關係を求むるよすがもなく、從つて統一の可能をも見出すことができない。單なる Aggregat に止る。かゝる觀方は必然にまた Atomisierung der Wirklichkeiten をも伴ふものである。此は概念構成に對して夫の analytische Logik が取る態度である。概念は單に具體的特殊の分解によつて獲た一般的要素の結合に止り、從つて概念と個體との關係は普遍と特殊との論理的關係であり、普遍は特殊に對し單に一般的典型たるに過ぎないものである。特殊は永劫に inkommensurabel であり gordian knot である。

是に反し第二の態度に於ては具體的經驗は其の背後の全體に內面的必然的に連りかゝる全體の裡に於て始めて唯一無二の特質を構成し得る。全體との關係に於て始めて其の具體的なる所以を得、其れによつて雜多相互の間に搖るぎなき統一を齎すことができる。部分は流れゆく全體に於て換ゆべからざる地位に立つ。言ひ換へれば具體的經驗は其の背後にある全體其のものゝ自己實現に他ならぬ。全體は部分に於て自己を特殊化し、部分は全體に於て生く。個體は正に全體と部分との

關係に於て其の必然性を得個體相互の間に嚴密なる統一が生ずる。此くのごときはラスクの所謂 emanatistische Logik の取る態度である。一度特殊より一般を抽象せる限り兩者の內面的關係は求むべくもなく、特殊の非合理性の問題は合理化すべくもない。先づ兩者の Identität の基礎の上に立ち、具體的全體としての一般より出發して始めて特殊の意義を明にし得る。emanatistische Logik に於ける概念は分析論理に於けるものと異り、現象の裡に自己を實現し、從つてまた個々の實在は概念發展の一つの Phase を動的全體の一つの Stelle を示すものである。今ラスクの語を籍りて謂ふならば分析論理に於ける概念が unterwirklicher Teilinhalt に過ぎないに反して發出論理に於ける其れは正に überwirklicher Urgrund を表はす。

今普遍と特殊との關係を考察するに當り、上記の二種の論理の他に尙二種の關係を考へることができるであらう。其一つは卽ち數學的概念と其の特殊との關係である。例へば圓に關する一般的概念に對して個々の現實なる Figur としての圓の關係である。此の場合個々の具體的なる圓は圓一般により先驗的に構成せられること恰も一般的空間が個々の空間の上に築かるゝものでなく、却つて反對に個々の空間の豫想もしくは其の基礎であると考へらるゝのと同一である。此の關係にあつ

ては當然特殊の非合理性の問題はあり得ない。一切の特殊的圓は普遍的圓から合理的に、先驗的に構成せられる。併しこゝに注意すべきことは普遍自らの裡に特殊化への作用を認めることができないことである。不斷の創造力を缺いて居るではなからうか。かゝる普遍は單に靜的に止まれるものではないか。

もしかく考へられるならば特殊は自らの必然的なる意義を失ひ、單に普遍の裡に埋沒し去るごときものであり、やがては普遍自らも終に空虛に陷るではなからうか。其の究極するところスピノーザのSubstanzの如くakosmistische Metaphysikであらねばならぬ。此に於ては特殊の問題は求むべくもない。此の意味に於てかくの如き普遍對特殊の關係はラスクの謂ふごとく分析論理と發出論理との中間を形成せるものであると見られる。下より上への論理たる分析論理に於て特殊の問題は永劫に殘されたる問題たると同時に、abstrakt Allgemeineを捨てゝwahrhaft Allgemeineより出發する發生論理に於て特殊の問題は解決し盡される。併もかくの如き普遍は特殊に對し一層高き實在と見らるゝことによつて必然に形而上學的實在を意味する。於此ヘーゲルの如く形而上學に陷らずdiscursiver Verstandに立つて尙能く特殊の問題を解決せんとするところに普遍對特殊の最後の樣式が現はれる。

卽ち此の樣式は個性の問題を通じて非合理性其のものゝ裡に合理性を措定し、合理性其のものゝ裡にも尙非合理性を措定せんとするものである。個性は單なる特殊にあらずして既に普遍化の途上に立つものであり rationalisierte Irrationalität である。同時に普遍も單に das Allgemeine schlechthin にあらずして其は他の系列に於ける合理化の出發點として見らるゝ限りに於て特殊である。irrationale Rationalität である。普遍は特殊の超越的對象たると同時に特殊の內的意味となつて特殊と內面的關係を有し得るに到る。而して個性をして單なる特殊たらしめずして「超個的個性」たらしむるものがもし其の極限に達したる場合此に普遍となり價値となり其の系列に係はる限り自足完了體をなす。しかも一度他の系列に及んでは又同一の關係を繰り返へし、此の意味に於て永久に不完了である。神に於てすら尙最後の休止點を與へ得ない。かゝる非合理性對合理性の關係は數學に於ける極限概念に於て髣髴さると見て此に極限の哲學を立し、ヘーゲルの如く形而上學に墮することなく、併も分析論理の暗礁に觸るゝことなくして能く特殊對普遍の問題を解き得るとゝもに價値哲學に於て價値の究極するところあるに反し、極限の哲學に於ては最後の休止點を許容せざる點に於て人生の無限の努力の可能を許るすものとせられる。左右田博士

は其の合理性對非合理性の問題を通じて觀たる極限概念の哲學に於て最も明快精到の論構を以て特殊對普遍の問題に對し其認識論的立場より獨自の斷案を下されて居る。唯唯私は私獨りの欲求より博士の思想の最も精細ある特色を成す點に於て尙一個の要求を有するのである。極限概念の哲學に於て非合理性の裡に合理性を措定するものは特定の認識目的である。夫れ夫れの系列に於て合理化の極限を形成する合理性の裡に非合理性を措定するものも夫れ夫れ特定の認識目的である。無限の系列を可能ならしめ極限概念の論構を導く所のものは又無限の認識目的である。卽ち無限のKategorienであり、Prinzipienでありアプリオリである。其處に極限概念の哲學の論構に於ける無限の進行が成り立つ。併し私はかくの如きin infinitumに止まり得ずして何等かの意味に於て統一を要求する。卽ち無限なるアプリオリの統一體を要求する。勿論かゝる統一體を以て認識界に立し得るとするならば其は決して妥當なるものとは謂はれない。單なるidealをrealと誤解するものであるとの非難も亦當然甘受しなければならぬ。唯私は夫れ夫れの立場に於て自足的絕對的なる無限のアプリオリを立する以上其れ等の主體としての統一を體驗界に想定せんとするのである。かくてアプリオリの絕對性卽ち其れ自らを支ふる力を把

握し度いと謂ふ意味に於て形而上學を要求し、かゝる形而上學が價値哲學の究極するところとして正當なる權利を批判的精神に於て保證し得るものであることを信せんとするのである。此の點に於て私一個の要求は博士が極限概念の哲學の學的權限を以て「合理性對非合理性の問題の論理的構造を明にするより以上何物をも要求するものに非ず」とせられた以上に走れるものであり、博士の企圖せられたる以外のものを極限概念の哲學に要求するものであり、其の不當なる自明的であると謂はなければならぬであらう。唯其の範圍に止まり得ずして論理的構造以外に兩者(合理性及び非合理性)の關係を內的に規定すべきsachlicher Grundを要求するのが現下の私の冀であるといふに過ぎない。

四

吾等は個體の一義的意味を把握し、個體相互の內面的關係を認むる上に於て常に其れ等の背後の全體に關係しなければならぬ。かくの如き全體は分析論理の考ふるごとき單なる典型を意味するものでなく、且つ數學的普遍の如きでもなく、正に西田教授の謂はるゝごとき創造力であり、特殊化の作用を營むものでなければならぬ。

個體に於て自己を實現するところの wahrheft Allgemeine でなければならぬ。一切特殊をかゝる普遍の光に於て眺むることは、やがて個體的偶然の氷解を意味し、個體は全體の裡に必然的一義的意味を以て唯一無二の地位を保持する。夫の發出論理に於ける概念對特殊の關係に於て始めて眞の個體概念に達し得るであらう。とは謂へ此には必然的に知識の立場の變換を要請する。比量的悟性の基礎に立つ人間認識に取つて眞の個體概念は單なる ideal に過ぎない。無限に近づき得るも尙決して永久に到り得ない極根概念である。唯神に於てのみ眞の個體概念は存し得るであらう。無限なるアプリオリの統一的主體たる體驗の世界に於てのみ始めて可能となる。併しながら認識圏內に於げる不完全なる個體概念、contradictio in adjecto を許さるゝならば抽象的個體概念と雖ども夫れ夫れの意味に於て尙何等かの全體との關係を語ることに於て、言ひ換へれば其の rationalisierte Irrationalität たる點に於て、遠く神を指示し體驗の世界に連ることを明かに語るものであると謂はなければならぬ。個體的知識に於ては藝術と同じく創造的想像の力を要すると考へられることも亦此の點を語るものではなからうか。嚮に個體を以て脚、對象界に立ちつゝも他方高く體驗界に連ると說いたのも亦此の意味に他ならぬ。

寔に吾々は個體に專念となることによつて、主觀を客觀に投ずることにより、否對象其のものゝ裡にhineinlebenすることにより知識の世界を去つて體驗の世界に歸入し得る。個體と一になるところ此にベルグソンの所謂直觀の世界が顯はれる。否單なる直觀の世界ではなく、過去を負ひ未來を豫示する純粹持續の世界はまた創造的綜合の世界であり、全體の實在となれる世界である。Handlungが同時にTatたる世界である。言ひ換へれば全體が自己を無限なる內容に實現しゆく無限の行動である。一々の內容は自己の內に無限なる全體を藏し、併も全體中にあつて一義的なる意味を有し、全體に於て無限なる自餘一切の內容と連なる。此に眞の個體概念のハイマートがある。かくの如きは意識の最も純なるものとして絕對無限の意志であると謂はなければならぬ。吾々は絕對無限の意志に於て物自體に直接し得ると同時に神に參し得る。個體概念の徹するところ神と一つなり得るといふ謂ふことができるであらう。此に個體概念に基く個性の絕對性が基礎づけられる。非合理性の裡に合理性を措定せしむるsachlicher Grundはかくの如き絕對意志に於て求め得らるゝとゝもに價値哲學の前提として價値哲學自らの導き得ざる價値の內的力、當爲自らを支ふべき生命をも亦此に見出し得るであらう。併もかゝる絕對的意志

は無限のアプリオリの統一主體として對象世界に見出し得べくもない。盡しアプリオリに依つて立つ對象界は既に限定せられた世界である。彼に取つては自らによつて立つ無限の世界は唯單なる極限概念に過ぎない。一度思惟することによつて絶對的意志は單なる其の射影となり、反省することによつて純粹持續は同質的時となり了はる。分析することによつて單なる形式としてのみ考へらるべきリッケルトの意識一般も具體的なる體驗の世界に於ては生きたる意識の流でなければならぬ。其の裡に意志を藏したものであり、かくの如き意志に於て始めて當爲と意識一般とは內面的結合を得る。對象の認識は體驗に於て可能である。此の意味に於て思惟の直下に體驗がある、神祕に立つて思惟が始まるとも謂ひ得る。神祕は思惟の究極するところであると同時に又其の基くところである。此にヘッセンの謂つた如く神祕論に Egressustheorie と Regressustheorie との二方向が生まれて來るのであらう。

嚮に個體概念の究極するところに於て到り得た體驗への方向を Regressusichtung とも名づけ得るならば又其れに對して Egressusichtung をも考へなければならぬ。一度反省することによつて Handlung は Handlung たることができず、特殊なる無限の內容は夫れ自らを支ふべき力を失ひ、以て無限の內容の背後にある統一的主體たる

wahrhaft Allgemeine との內面的關係を斷つに到る。かくの如き一般者との關係に於て始めて具體的特殊たり得た內容は於此自己をして特殊たらしむべき必然の基礎を失はなければならぬ。Contradictio in adjecto を許るさるならば此は抽象的特殊である。純粹持續の弛緩によつて招來さるべき同質的時の狀態である。

かくの如き抽象的特殊に於ては特殊の必然性が充全に認められない限りに於て偶然性を含んでゐると觀なければならぬ。抽象的特殊は rationalisierte Irrationalität である。解くにも解き得ない Brutalität こそ此の立場に於ける實在の眞相である。此に於ては直觀と悟性との對立は脫し得べくもない。反省することは思惟の立場は立つことであり，此は discursiver Verstand に卽することである。此の立場にある限り個體の問題は無限に合理化に進み得るも到底完了せらるべきではない。極限概念の哲學は正に這般の消息を語る精到なる論構と謂はなければならぬ。夫の無限なる內容の統一主體としての神も Tathandlung として純粹意志として端的に體驗し得られんも一度內容との必然的關係を失ふことによつて無限の統一は單なる in infinitum を示すのみである。田邊博士の謂はれたごとく思惟の立場に於ては神は唯極限概念たり得るのみである。

以上述べたRegressusrichtungもEgressusrichtungもともに更に〳〵深き思索を要しなければならぬ。問題の解決は遠き前途にあつて、ひたすらなる精進を待つてゐるであらう。唯此には價値哲學がein Wissen von den Problemenであり、ein Weg zur Weisheitに止る限りに於て求むべくもなき問題の最後の解決をば何等かの意味に於て求めんとする形而上學に對する切なる要求をば說くに止まる。併もかくの如き要求が多分は滿さるであらうとの示唆をば個體概念を通じて觀んとし、且つ何等批判哲學の精神と矛盾するものでない事に依つて獨斷的であるとの非難の妥當ならざる所以を明にせうとしたのが此の小篇の目的である。哲學をもつて"eigentlich Heimweh"であると呼び度いのが私の切なる要求である。